

東詰に残る赤穂浪士ゆかりの碑

児童遊園の片隅には、「日乃恩や忽ちくたく 厚水」と刻まれた小さな句碑もある。何も記されていないが、大高源五の句碑だという。

浪士の中で俳諧に親しんだ者は多く、源五もそのひとりだった。号を子葉といい、江戸に出てからは、松尾芭蕉の門人、宝井其角と親しんだという。本懐を遂げた後、源五に会った其角が「我が雪と おもへは かるし笠のうえ」と詠み、それに源五が返した句だといわれている。

四一之橋

いちのはし

赤穂浪士も渡った小橋

隅田川と平行に南へ歩き、赤穂浪士たちも通過した一之橋を渡る。堅川にかかる橋で、当時は一ツ目の橋と呼ばれていた。堅川の橋は、隅田川河口に近いほうから一ツ目の橋、二ツ目の橋、三ツ目の橋と名づけられていた。

堅川の北側には本所相生町があり、その一角に赤穂浪士の前原伊助が住んでいたという。



▼一之橋から見た堅川。橋詰で釣船店が営業し、下の情緒が漂う

余話

討ち入りの合言葉

浪士たちは、表門組と裏門組の二手に分かれて吉良邸に討ち入った。月明りだけが頼りの深夜、勝手のわからない屋敷で戦うのである。戦闘中に、表門組と裏門組が遭遇した場に備えて、「山」「川」の合言葉を決めてあった。

実際には、浪士たちの衣装は黒っぽい色で統一されていたのに対し、吉良方は寝巻姿が多かったもので、敵味方の判別は容易だったらしい。

五 江島杉山神社

えしまぎや まじんじや

境内に残る不思議な洞窟

一之橋を渡ってしばらくいくと、通りの左側に江島杉山神社の鳥居が見えてくる。この神社は、元禄6(1693)年、將軍綱吉の命により、江の島の江島神社を勧請したのが起こりという。

▼都会には珍しい江島杉山神社の岩室



▲江島杉山神社

境内に「岩室(洞窟)」があり、内部には3体の石像がまつられている。そのひとつつ弁才天は珍しい姿をしている。頭部が仏像、胴体が蛇なのだ。都心にもまだ江戸的なものが残されていて、おもしろい。



▲岩室内部の石像

新大橋・御船蔵跡

しんおおはし し・あはし ぐらあと

隅田川3番目の橋

江島杉山神社を出て、新大橋に向かう。新大橋が最初にかけられたのは、元禄6(1693)年で、両国橋が大橋と